慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	内山先生の比較政治学
Sub Title	
Author	粕谷, 祐子(Kasuya, Yuko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.3 (2009. 3) ,p.139- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事 : 内山秀夫先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20090328-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

うる。

ところが、ノイマンによれば、「もし、カントの法理論が、彼の倫理学から離れて検討されるとすれば、自然法がそこから完全に姿を消していることがわかる」（拙訳・前掲書五四頁）。実は内山君は、このあたりを読んでいて私に命令をしたのではないか。誠に、「友を選ばば書を読みて」である。

名誉教授　倉澤康一郎

内山先生の比較政治学

鋭い視線とともに、胸に突き刺さる言葉を次々と発する人。これが、一九八〇年代後半に内山ゼミの学生であった私の内山秀夫先生に対する印象だ。しかしながら、先生が伝えようとしていたことの全体像は、不出来かつ不真面目な学生であった当時の私にはよくわからなかった。「この人は（思索的な意味で）何かと格闘している」と断片的に肌で感ずるばかりで、それを体系づけて理解することはできなかった。その後私は縁あって二〇〇四年より義塾で比較政治学（比較地域研究論）を担当することになったが、この追悼記事執筆を機に、内山先生が比較政治という学問分野で何と格闘していたのかについて考えてみたい。

比較政治学は、アメリカでの政治学研究を中心に第二次世界大戦後に生まれた学問分野である。社会科学の最先端の研究分野への助成をおこなう社会科学研究評議会（SSRC）が一九五四年に「比較政治委員会」を創設し

たことと前後して、比較政治学は政治学の一分野として確立してゆく。その最大公約数的な定義は、世界各国の国内政治を理論枠組を用いて実証的に分析する研究分野、となろう。内山先生は一九五九年提出の修士論文「アメリカ政治学にかんする一考察―特に比較政治学を中心に―」以来、この分野で多くの論文・著書・翻訳を発表されているが、ここでは、一九六〇年代からの比較政治に関する主要論文を集めた『比較政治考』（三嶺書房、一九九〇年）を中心にみてゆくことにする（以下引用頁数はすべて同書より）。

『比較政治考』全体を通じていえることは、その分析が一次資料などに基づいた実証分析ではなく、他の研究者の分析を基にした「分析の分析」となっている点である。内山先生はいわばメタ理論家であった。では、理論家として先生がこだわっていた問題は何であったのだろうか。『比較政治考』から浮び上がってくるのは、戦後のアジア・アフリカでの新興諸国の台頭をうけ、同時代の政治状況はどう理解できるだろうか、という問題意識である。これは例えば、次のような指摘に端的にみられる。「現代は、かつての世界が先進西欧諸国によってのみ構成されていたのとは異なり、まさしく文明が接触し、その意味であらゆる人間が人類［傍点原文］として平等に世界を構成した、人間の歴史において未曾有の時代である」（一六九頁）。先生は、日本の知識人の多くがその思索の基礎を西欧を対象とした分析に置いていた時代に、新興諸国のつきつけた問題をいち早く、かつ深く考えた学者のひとりであったといえるだろう。そして、この問題を考えるにあたって検討されるのが、ブラックやアイゼンシュタットの近代化論、アーモンドの政治システム類型論、パイの政治発展論、ハンチントンの政治制度化論など、当時の比較政治学をリードしていた一連の研究者たちの理論であった。

内山先生によるこれら理論の検討は、理論それ自体の論理的整合性や妥当性の考察だけにとどまらず、現代世界の構図を含意として描き出す。先生によれば、「第三世界」の出現以前には国家の存在が所与のものとされ、人間は「国民」として国家と結びついていると想定されていた。これに対し、新興諸国は実はそうではないさまざまな結びつき方があることを我々につきつけ、人間は政治の世界における主体の位置を取り戻した。換言する

と、「人間のいとなみとしての政治」の可能性が開かれたのである。また、新興諸国の登場により、民主主義のあり方も変化した。すなわち、民主主義は「国家をも否定する可能性をもった政治原理」となり、さらに政治学は「それがどこの地点で社会の統合原理として作動し、個人を社会につなぎとめるか」（三〇一頁）を模索しなければならなくなった。

比較政治学を起点とする先生の思索は、戦後日本の姿にも投げかけられる。新興諸国において「人間のいとなみとしての政治」が噴出したことに比べ、日本の戦後は、「民主主義の国家化」（三九八頁）を特徴としていた、と先生は喝破する。すなわち、日本における「民主化」の実相は、戦前すでに成立していた「国家的外装をぬぎかえる作業」（三九八頁）でしかなかった、というのである。

同様の秀逸な同時代分析をすべて挙げる紙幅はここにはないが、要するに、内山先生にとっての比較政治学とは、根源的（ラディカル）な問題、特には、同時代の政治状況を考える際の出発点であり、かつ自らの考えを相対化する立脚点であったといえるだろう。私が義塾に就職した年の四月に先生から頂戴したお手紙には、「もう三〇年も前に比較政治学はラディカルネスを失ってしまいましたね」とある。比較政治学を専攻する者として、耳の痛い指摘である。断片化された政治現象を対象にして実証性を追及する傾向の強い最近の研究状況において「内山先生の比較政治学」をいかに取り込めるか、これを今後の自分の課題としたい。

法学部准教授　粕谷祐子